

【開催報告】コレクション特別展「松山藩御用絵師列伝」

長 井 健

開催の経緯

松山城三之丸跡（堀之内・城山公園）に位置する愛媛県美術館では、開館以来、歴代の伊予松山藩主・久松松平家に仕えた御用絵師たちについて、調査研究・作品収集を精力的に進めてきた。初代御用絵師の松本山雪（？～一六七六）については、二〇〇七年に企画展を開催し⁽¹⁾、また七人目にあたる遠藤広美（二七四～一八六二）についても、二〇一〇年に開催した「つながる／つなげる―愛媛ゆかりの芸術家」展で顕彰した⁽²⁾。その後もさらに両者を中心に、折に触れて本紀要等において論考・作品紹介等を重ねてきており⁽³⁾、一定の成果を挙げられたと言える。そして、これ以外の御用絵師たちについても、開館以来二十年を経て、少しずつではあるが作品収集・寄託受入等が進み、コレクションを通してようやく一望できる状況となった。そこで、二〇一九年十一月二十三日から二〇二〇年一月十三日にかけて「松山藩御用絵師列伝」と題したコレクション特別展を開催、寄託品を含む計五十二件を展示し、これまでの調査研究・作品収集の成果を初めて一堂で紹介することができた（出品目録は表1参照）。予算等の関係で、残念ながら図録を作成することが叶わなかったため、本報告をもって、展示の記録としたい。

歴代の御用絵師たち

松山藩主・久松松平家に仕えた御用絵師は全部で九名を数える。以下、彼らの

略歴を順に記しておく。

(一) 松本山雪「まつもと・さんせつ」 生年不詳～延宝四年（一六七六）

近江の生まれ。本名・恒則。岨嶺、心易とも号した。同時代史料としては『乾光院殿御治世支配帳』（明暦四年「一六五八」）に「扶持方斗（中略）式人扶持（中略）一 同 松本山雪」と記されるのみである。天保五年（一八三四）に子孫が記した「松本家系図」によれば、松本家は筑前黒田家家臣で、父は紀州藩のち藤堂高虎に仕えるも浪人したという。寛永十二年（一六三五）、松平定行の桑名からの転封に従って来松したと伝わるが、御所造営に携わったとの家系図の記述や、奇想の絵師として知られる狩野山雪（一五九〇～一六五一）と近似した個性が認められることから、京狩野派絵師の一人と考えられてきた。ただし、現段階では京狩野派との具体的な接点は認められていない。

《製茶風俗図屏風》《諸芸遊楽図屏風》など中国趣味を示す特異な風俗画や、奇怪な容貌の野馬図などを描き、いささかアクの強い作風が特徴。長崎探題をつとめた藩主定行の新奇な中国趣味、文人的趣向も濃厚に反映されていると見られる。また、朝岡興禎編『古画備考』（嘉永四年「一八五一」起筆）では、山雪を「雪舟風ナレドモ、如雪、周文ノ風アリテ」「雪舟流ヲ帯ベル者、純粹ノ狩野派ニハアラズ」と評しており、狩野探幽（一六〇二～一七四四）、雲谷等益（一五九一～一六四四）、曾我二直庵（生没年不詳）らを中心に、江戸前期画壇を席巻した雪舟

追慕・室町回帰の影響を受けた一人としても位置づけられる。

(二) 松本山月「まつもと・さんげつ」慶安三年(一六五〇)～享保十五年(一七三〇)

本名・貞則。半輪斎とも号した。山雪の養子となり、跡を継いで藩の画御用を務めた。山雪に比べると現存作品は少ないが、馬図を中心に、山雪の画風を継承しながらも、独自の展開を見せている。松本家菩提寺である万福寺(松山市土居町)には絹本着色の《仏涅槃図》大幅が伝わるほか、金刀比羅宮(琴平町)の《馬図屏風》、八栗寺(高松市牟礼町)の《八栗寺伽藍絵図》、観音寺の商家・浮田家旧蔵の《野馬図屏風》(香川県立ミュージアム蔵)など、讃岐地方に基準的作例が複数伝来する。

なお、『懐中便覧松山役録』(宝永元年「一七〇四」)に「三人扶持 松本 山月」とあるが、この時、藩は浜町狩野家初代・随川岑信(一六六二～一七〇八)にも禄を与えており、江戸と国許とで絵師の二元体制がとられていたことが知れる。山月の長子・茂助則恒は次小姓として取り立てられたため、以後の松本家は藩士として仕えることとなり、絵師としての松本家は二代で途絶えた。

(三) 豊田随園「とよた・ずいえん」生年不詳～享保十七年(一七三二)

常之とも号した。『懐中便覧松山役録』には「四人フチ 十三石 豊田随円」と記される。また『古画備考』の狩野随川甫信門人の欄に「米田金七甫壽、改称随節、又随圓ト改ム、高松家」と記され、浜町狩野家二代・随川甫信(？～一七四五)に学んだと伝わる。

絵画的に見れば、松本山雪・山月と続いた京狩野派の様式から一転し、時流に沿って、江戸狩野派の王道をゆく淡泊温雅で瀟洒な作風を、伊予の地にもたらした存在と位置づけられる。随園が仕えた藩主・松平定直の治世(延宝～享保初までの約半世紀)は、地坪制度の導入や検見法から定免法への移行による農政改

革をもたらした経済安定を背景に、儒学の興隆や、定直自身も宝井其角に入門して俳諧を愛好するなど、文化面でも成熟を迎える。いわゆる江戸風の文化が本格的に伊予の地へ移入伝播されることとなった。随園、そして以降しばらくは江戸狩野派系の絵師たちが御用絵師に登用されたことも、こうした藩政の特徴を踏まえてみると、より合点が行く。

(四) 武井周発「たけい・しゅうはつ」元禄七年(一六九四)～明和七年(一七七〇)『武井氏家譜』によれば、押川由貞の四男として生まれ、名ははじめ作之丞、のち半三郎、半蔵、作右衛門。正徳五年(一七二五)、河野通有の家系を汲む武井家の養子に入って同家の家督を継ぎ、同七年、次小姓となった。享保二十年(一七三五)、藩主松平定喬の命で作画したことがきっかけで御用絵師となったという。画は、先代の御用絵師で、縁戚関係にあった豊田随園に学び、周発の前は常美と号した。

基本的には随園の作風を継承しながらも、より雄渾な水墨技法に見どころがある。加えて『唐美人図屏風』『花鳥図屏風』などの豪華な作風のものもあり、堅実な画技と幅広いレパートリーを兼ね備えた絵師であったと言える。

(五) 豊田随可「とよた・ずいか」享保六年(一七二二)～寛政四年(一七九二)

豊田随園の子。常令とも号した。『古画備考』の狩野随川甫信(？～一七四五)門人の欄に「友盛弟子、父随圓、松山家」と記され、父・随園とともに、浜町狩野家に学んだことが分かる。また『松山分限録』(寛政元年「一七八九」)に「御側医師同格」として「六人フチ 百石 御画師 豊田随斎」「三人フチ 十五石 画執行 豊田千里」とあるいづれかが随可と推測される。

随園の淡泊瀟洒な作風に比べると、より力強い筆致が特徴。中でも《旭丹頂・月黒鶴》は代表的作例と言える大作で、箱書きでは藩主拝領の品と伝える。

(六) 遠藤広古「えんどう・ひろふる(ひろひさ)」 寛延元年(一七四八)〜文政七年(一八二四)

本名・伴助。子の広実とともに、江戸詰の形で、二代にわたって松山藩に仕えた。

『松山歴俸略記』(弘化年間「一八四四〜四七」)に「初代伴助、絵巧者二付寛政七年於江戸出、六十俵常府大小姓格絵方、後常詰格」と載る。また川崎千虎編『名印部類』(明治二十五年刊)には、住吉派四代・広守(一七〇五〜七七)の門人として「本姓梅原氏後遠藤ト改ム 初広起 蝸蘆ト号ス 寛政年中伊予松山松平家ノ画師ト為ル累世之ヲ襲フ 文政七年十一月十七日死年七十七」と記される。

いかにも住吉派らしい正統なやまと絵の様式を基本にした穏健な作風を見せるが、「傲光琳筆意」と記す『紅葉鹿図』といった琳派風のものもあり、時流に柔軟に応じた姿勢も垣間見える。

(七) 遠藤広実「えんどう・ひろざね」 天明四年(一七八四)〜文久二年(一八六二)

広古の子。『古画備考』の住吉広行門人の欄に「広実、遠藤伴助」と載るほか、弘化年間(一八四四〜四七)の『松山歴俸略記』に「二代、六十俵三人扶持 遠藤伴助」、嘉永五年(一八五二)の『松山武鑑』常府の常詰格の欄に「六十俵 伴師 遠藤伴助」、安政六年(一八五九)の『幕末松山藩御役録』常詰格の欄に「六十俵 常府、格 遠藤伴助」と、それぞれ記される。また川崎千虎編『名印部類』には「初名古致又古行 通称伴助 文久二年五月廿六日死年七十九」と記される。

画技は広古よりもさらに幅広く、和歌や古典文学を主題とした正統なやまと絵の様式に加え、幕末特有の復古的要素も認められるほか、同時代の多様な絵画様式(江戸狩野派、写生派、文人画、南蘋派など)を習得していたことも看取される。

三子の広宗(第二回内国絵画共進会受賞、鑑画会第一回大会出品)、貫周(酒井若狭小浜藩酒井家に仕え、明治維新後は内務省地理寮、農商務省などに勤務)、広賢(住吉宗家八代目を継承、明治維新後はフェノロサの日本美術研究にも協力)はいずれも、幕末から明治初期の美術史上で重要な役割を果たしており、遠藤家

の家格の高さや、住吉派内における立場の強さがうかがえる。広古、広実は、譜代大名ながら親藩に比肩しうる待遇であった久松松平家への派遣にふさわしい絵師として、おそらくは特任のような立場で迎え入れたかと推測される。

(八) 安倍晴洋「あべ・せいよう」 文化六年(一八〇九)〜弘化二年(一八四五)

桑村郡新町(現・西条市)の庄屋安倍家の分家に生まれる。安倍家の過去帳には「幼ニシテ画道ヲ学ビ 師ハ東都狩野氏故 京、攝、東都ニ数年遊学シ 国君藩ヨリ、府ニ招カレ、業ニ就任スル 行年三十七歳」と記され(4)、「晴洋養年」と自署する雅号からも、木挽町狩野家九代・晴川院養信(一七九六〜一八四六)に学んだと考えられる。晴川院自筆の『公用日記』(東京国立博物館蔵)に、弘化度江戸城本丸御殿障壁画制作に関わった多くの門人たちが記される中に「晴洋」の名があるのが本人と見られる(さらに、晴洋の跡を継いで藩絵師となった荻山雅弘と見られる人物(覚右衛門)の名も列記されている)。

『松山武鑑』(嘉永五年「一八五二」)には「常府 式具馬具并屏風預 十人扶持 安部晴洋」と記される。また天保十三年(一八四二)十一月には、大山祇神社の宝物の模写を行ったことが、同社の公社用日記に詳しく記されている。

(九) 荻山雅弘「おぎやま・ただひろ」 文政五年(一八二二)〜明治九年(一八七六)

本名・覚右衛門。雅窓とも号した。自ら記した「口説」などによれば、祖父、父もともに絵をよくしたが、画道を家業としたわけではない普通の江戸詰めの藩士であったところ、参勤交代に従いつつ、天保十三年(一八四二)には安倍晴洋の松山城二之丸御殿障壁画修復を手伝うなどし、さらに同十五年(一八四四)に自力で木挽町狩野家九代・晴川院養信に入門して修行に励んだという。晴川院を筆頭に江戸狩野派絵師たちが総動員された弘化度江戸城本丸御殿障壁画制作にも関わり、弘化四年(一八四七)には十代・勝川院雅信(一八二三〜七九)より免

許を得て「雅弘」と号した。おそらくこの修行時期に描かれたものと見られる多数の粉本類が、当館寄託となっている。

嘉永二年（一八四九）には安倍晴洋の跡を継ぎ、晴れて藩絵師に任ぜられる。元治元年（一八六四）、慶応二年（一八六六）の二度の長州征討には、藩主松平勝成に従い、絵図制作などを行った。なお、同時期に同じく藩絵師として厚遇されていた遠藤広実を羨んで、専任の絵師となるために苦勞を重ねてきた自身の待遇改善を、藩に訴えるべく書かれた「嘆願書」の存在も知られる（5）。

初公開作品より

出品作品のうち、約半数は本展において初公開となるものであった。これらは、ここ数年の間に、相次いで当館に収蔵され、また個人所蔵家より寄託を受けたものである。以下、そのうち特に注目すべき作品をいくつか紹介しておきたい。

・松本山雪《枯木吠々鳥図屏風》（目録No.8、図1）

近年、新たに見出された屏風。木村重圭氏による詳細な紹介（6）がなされたのち、当館へ寄託となった。

おそらくはもと一 双屏風だったうちの左隻が伝わったと考えられる。無背景の金地の上に墨のみで描かれる花鳥図は、桃山〜江戸時代初期に流行したが、金地屏風の作例がこれまでほとんど確認されなかった山雪にとつては、重要な発見である。他の作品のような細部描写が見られず、ゆったりとした筆致の大らかな画風は、桃山的な気分を残す。おそらくは、比較的若い時期の作（松山移住前）ではなからうか。

・遠藤広古《富士図》（目録No.31、図2）

淡墨で簡略に描かれた小品であるが、緩みのない端正な筆致が用いられ、画面全体から高い格調を感じさせる。富士山の左側の裾野に、胡粉の点描によって桜

の花が咲いているところは、水墨作品でありながら、情緒豊かなやまと絵の世界が巧みに表現される。

注目すべきは、画面右寄りに併記される賛文である。江戸時代中・後期を代表する文人、太田南畝（蜀山人）（一七四九〜一八二三）による狂歌「富士のねの表はするがうらは甲斐前は北面のちは西行」が記される。江戸の文人ネットワークと広古（ひいては、やまと絵師）とのつながりを示す、興味深い作例である。

・遠藤広古《模本類》（目録No.32、図3）

広古による絵巻の模写。《木曾物語絵巻》三巻と《堀川夜討絵巻》二巻からなる。いずれも原本は、住吉派の初代・如慶（一五九九〜一六七〇）の作で、現在、前者は出光美術館所蔵、後者は東京国立博物館所蔵のものと思われる。両本ともに、当初から備わっていたと思われる保管用の袋が付属し、《木曾物語絵巻》の袋には文化十年（一八一三）の年記がある。

なお、東京藝術大学美術館に所蔵される住吉家粉本の中にも、《西行物語絵巻》《春日権現験記絵巻》など広古による中世絵巻の模写が含まれている。さらに、武蔵野美術大学美術館や東京国立博物館にも、子の広実、孫の貫周の古絵巻・中国絵画の模写が所蔵されており、彼らが日常的に古絵巻を中心とした古画の模写研究をしていた様子がうかがえる。

《木曾物語絵巻》には「遠藤伴介廣古主」という款記があり、また両作品ともに、袋と本紙には広古の別号である「蝸廬藏」の蔵印が捺されていることから、ともに広古筆と判断して今回展示したが、《堀川夜討絵巻》下巻の巻末には「文政八癸乙酉 遠藤伴介古致」と記されており、広古は前年の文政七年（一八二四）に没していることから、こちらは広実の筆による可能性も考えられる。本作については、いずれ稿を改めて、詳しく考察する機会を持ちたい。

・荻山雅弘《海岸山岩屋寺図》（目録No.51、図4）

四国八十八ヶ所霊場第45番札所・岩屋寺の景観を描く。古来、修験者たちの霊場として信仰を集め、険しい岩窟の行場が残されていることでも知られる同寺の景観は、鎌倉時代に描かれた絵巻《一遍聖絵》(国宝、神奈川・清浄光寺(遊行寺)蔵)が有名だが、本作品もおそらくそれを意識しながら、さらに雪舟《山水長巻》(国宝、山口・毛利博物館蔵)あたりに倣った筆法・構図によって、当地の峻厳さを表現している。

なお、現状は卷子装となっているが、それほど長さのない横幅(一三五・五センチ)や、画面左端ギリギリまで絵があることなどから、もとはさらに左に画面が続いていたものと思われる。真景図として、岩屋寺周辺の景観が他にも描かれていたのか、あるいは八十八箇所霊場の他の札所が描かれていたのか、興味は尽きない。

結び

以上のように、伊予松山藩の場合、2〜3人ごとに、京狩野派系↓江戸狩野派(浜町狩野家)系↓住吉派系↓江戸狩野派系(木挽町狩野家)と御用絵師の画派が変わっていく。これは一見、多様にも見えるが、はじめの松本山雪・山月を除けば、あとは江戸幕府の御用絵師の系譜と同調するものと言え、久松松平家と徳川宗家との親近関係をよく物語っている。その意味では、松本山雪(および山月)に関しては、御用絵師制度が確立する以前の未だ混沌とした初発的な状況を示しているように思える。あるいは「御伽衆」的な立場の人物だったのかもしれない。山月の代に、並行して江戸で狩野随川岑信に禄を与えているのは、国許と江戸で絵師の二元体制を取ることに加え、この時期(十七世紀末〜十八世紀初頭頃)松平定直の治世)に、幕府に準じた絵師雇用体制を整えつつあったことを意味していると言えるのではあるまいか。今回、初めて9名の御用絵師たちを一堂に並べてみて、そのような展開が想定されるように見えてきた。今後は、さらに歴代藩主の文化的素養、藩政としての文化活動などに詳しく着目しつつ、松山藩にお

ける御用絵師のあり方について、研究を深めていければと考えている。

註

- (1) 『松山藩御用絵師 松本山雪 桃山と江戸のはざまに』二〇〇七年二月十日〜三月二十五日
- (2) 『つながる／つなげる―愛媛ゆかりの芸術家たち』二〇一〇年十月九日〜十一月二十八日
- (3) ・梶岡秀一「江戸時代伊予国諸侯の絵師の制度に関する一試論」『愛媛県美術館研究紀要』第六号、二〇〇七年
 ・拙稿「松本山雪の花鳥図について」『愛媛県美術館研究紀要』第八号、二〇〇九年
 ・梶岡秀一「幕末明治初期における復古派としての遠藤廣宗、遠藤貫周と住吉広賢」『愛媛県美術館研究紀要』第十一号、二〇一二年
 ・拙稿「松山藩絵師・遠藤広実研究(一)」『愛媛県美術館研究紀要』第十一号、二〇一二年
 ・拙稿「作品紹介 松本山雪筆《龍虎花鳥山水人物山水図押絵貼屏風》」『愛媛県美術館研究紀要』第十四号、二〇一五年
 ・梶岡秀一「遠藤広実筆《源氏物語図》双福―松山藩久松家と正親町三条実愛」『愛媛県美術館研究紀要』第十四号、二〇一五年
- (4) この過去帳については、以下を参照。矢野徹志『近世伊予の画人たち 愛媛近世絵画の諸流』愛媛文化双書刊行会、二〇一六年。
- (5) この嘆願書については、以下を参照。矢野徹志「幕末の松山藩画師萩山雅弘伝―『萩山家文書とその絵画資料』にみる藩絵師の実態―」(上) (下) 『伊予史談』第三五九、三六〇号、二〇一〇〜二〇一一年。
- (6) 木村重圭「名画探録II 松本山雪筆「枯木叭々鳥図屏風」―伊予松山の山雪―」『聚美』二十六、聚美社、二〇一八年

表1 コレクション特別展「松山藩御用絵師列伝」 出品目録

No.	作者名	作品名	制作年	材質・形状	所蔵／指定	法量(縦×横:cm)
No.1	松本山雪	製茶風俗図屏風	江戸時代前期	紙本着色・六曲屏風一双	愛媛県美術館蔵／ 愛媛県指定有形文化財	各 161.5 × 360.0
No.2	松本山雪	雄鶏図	江戸時代前期	紙本墨画淡彩・軸	愛媛県美術館蔵	110.5 × 51.6
No.3	松本山雪	野馬図	江戸時代前期	紙本墨画淡彩・軸双幅	個人蔵(寄託作品)	各 100.4 × 44.5
No.4	松本山雪	馬図屏風	江戸時代前期	紙本着色・六曲屏風一隻	愛媛県美術館蔵	各 108.0 × 51.0
No.5	松本山雪	野馬図押絵貼屏風	江戸時代前期	紙本墨画・六曲屏風一双 のうち左隻	個人蔵(寄託作品)／ 松山市指定有形文化財	各図 131.5 × 53.5
No.6	松本山雪	山水図	江戸時代前期	紙本墨画・軸双幅	個人蔵(寄託作品)	各 100.0 × 43.8
No.7	松本山雪	諸芸遊楽図屏風	江戸時代前期	紙本着色・六曲屏風一双	個人蔵(寄託作品)	各 143.0 × 357.2
No.8	松本山雪	枯木叭々鳥図屏風	江戸時代前期	紙本金地墨画・六曲屏風 一隻	個人蔵(寄託作品)	150.7 × 352.8
No.9	松本山雪	龍虎花鳥山水人物図押絵貼屏風	寛文9年(1669)頃	紙本着色・六曲屏風一双 のうち左隻	個人蔵(寄託作品)	各図 126.5 × 54.4
No.10	松本山月	七福神図	江戸時代中期	紙本墨画淡彩・軸	個人蔵(寄託作品)	44.7 × 82.0
No.11	豊田随園	蘇軾騎驢図	享保16年(1731)	絹本墨画・軸	個人蔵(寄託作品)	91.6 × 27.0
No.12	豊田随園	鍾馗図	江戸時代中期	紙本墨画・軸	愛媛県美術館蔵	74.5 × 35.8
No.13	豊田随園	花鳥図押絵貼屏風	江戸時代中期	紙本墨画淡彩・六曲屏風 一双のうち右隻	愛媛県美術館蔵	各図 128.3 × 47.8
No.14	豊田随園	花鳥人物図押絵貼屏風	江戸時代中期	紙本墨画淡彩・六曲屏風 一双のうち左隻	個人蔵(寄託作品)	各図 132.5 × 53.6
No.15	武井周発	花鳥図屏風	江戸時代中期	紙本金地着色・六曲屏風 一隻	個人蔵(寄託作品)	87.3 × 224.0
No.16	武井周発	山水図屏風	江戸時代中期	紙本着色・六曲屏風一隻	愛媛県美術館蔵	108.0 × 237.0
No.17	武井周発	山水図	江戸時代中期	紙本着色・軸	愛媛県美術館蔵	104.5 × 42.6
No.18	武井周発	双鶴図	宝暦13年(1763)	絹本墨画・軸双幅	個人蔵(寄託作品)	各 113.2 × 39.5
No.19	武井周発	寿老人・龍・鯉図	宝暦9年(1759)	絹本墨画・軸三幅対	個人蔵(寄託作品)	各 113.2 × 39.5
No.20	武井周発	雲龍図押絵貼屏風	江戸時代中期	紙本墨画・六曲屏風一隻	愛媛県美術館蔵	各図 131.0 × 56.6
No.21	武井周発	唐美人図屏風	宝暦13年(1763)	紙本金地着色・六曲屏風 一双	愛媛県美術館蔵	各 172.0 × 378.0
No.22	豊田随可	五節句之図	江戸時代中期	紙本着色・軸	愛媛県美術館蔵	各 119.8 × 49.7
No.23	豊田随可	松鷹図	江戸時代中期	絹本着色・軸双幅	個人蔵(寄託作品)	各 112.0 × 29.8
No.24	豊田随可	竹虎図	江戸時代中期	絹本墨画・軸双幅	個人蔵(寄託作品)	各 105.6 × 39.0
No.25	豊田随可	旭丹頂・月黒鶴	江戸時代中期	紙本着色・軸双幅	個人蔵(寄託作品)	各 114.2 × 71.6
No.26	遠藤広古	雅経卿の歌意	江戸時代後期	絹本着色・軸	愛媛県美術館蔵	82.1 × 38.6
No.27	遠藤広古	架鷹図	江戸時代後期	紙本着色・軸双幅	愛媛県美術館蔵	各 108.6 × 43.2
No.28	遠藤広古	紅葉鹿図	江戸時代後期	紙本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	73.5 × 25.7
No.29	遠藤広古	猿田彦神図	江戸時代後期	紙本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	86.9 × 27.4
No.30	遠藤広古	富士図	文化5年(1808)	紙本墨画・額	愛媛県美術館蔵	56.7 × 119.8
No.31	遠藤広古	富士図(賛・太田南畝)	江戸時代後期	紙本墨画・幅	個人蔵(寄託作品)	24.4 × 53.6
No.32	遠藤広古	模本類	江戸時代後期	紙本墨画・まくり	個人蔵(寄託作品)	縦 30.6 ほか

No.	作者名	作品名	制作年	材質・形状	所蔵／指定	法量(縦×横:cm)
No. 33	遠藤広実	拾得図	江戸時代後期	紙本墨画淡彩・軸	愛媛県美術館蔵	128.5 × 43.0
No. 34	遠藤広実	関羽図	文化2年(1784)	紙本着色・軸	愛媛県美術館蔵	118.6 × 25.2
No. 35	遠藤広実	南天に仔犬図	江戸時代後期	紙本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	91.5 × 33.0
No. 36	遠藤広実	楽師図	嘉永6年(1850)	紙本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	81.0 × 33.7
No. 37	遠藤広実	犬追物図	江戸時代後期	絹本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	54.2 × 80.0
No. 38	遠藤広実	十六羅漢図	江戸時代後期	絹本着色・軸	愛媛県美術館蔵	91.7 × 43.0
No. 39	遠藤広実	貴人親楓図	江戸時代後期	絹本着色・軸	愛媛県美術館蔵	81.3 × 31.6
No. 40	遠藤広実	源氏物語図	弘化元-2年 (1844-45)	絹本着色・軸双幅	愛媛県美術館蔵 (下村観山旧蔵)	各90.0 × 32.0
No. 41	遠藤広実	吉野・龍田図	安政3年(1856)	絹本着色・軸双幅	愛媛県美術館蔵	各95.5 × 30.2
No. 42	遠藤広実	桜山人物図	弘化元年(1844)	絹本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	110.6 × 44.2
No. 43	遠藤広実	邸内貴人図	安政3年(1856)	絹本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	114.8 × 47.0
No. 44	安倍晴洋	雪柳雀図	江戸時代後期	紙本墨画淡彩・軸	個人蔵(寄託作品)	131.5 × 52.0
No. 45	安倍晴洋	龍虎図	江戸時代後期	絹本墨画・軸双幅	個人蔵(寄託作品)	各119.0 × 32.4
No. 46	安倍晴洋	吉野・龍田図	江戸時代後期	絹本着色・軸双幅	個人蔵(寄託作品)	各127.4 × 50.5
No. 47	荻山雅弘	春江帆船図	江戸時代後期～ 明治時代初期	絹本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	98.0 × 36.0
No. 48	荻山雅弘	掛花図	江戸時代後期～ 明治時代初期	絹本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	107.1 × 38.4
No. 49	荻山雅弘	立雛図	江戸時代後期～ 明治時代初期	絹本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	38.6 × 94.3
No. 50	荻山雅弘	瀧に鷹図	江戸時代後期～ 明治時代初期	絹本着色・軸	個人蔵(寄託作品)	117.0 × 38.9
No. 51	荻山雅弘	海岸山岩屋寺図	江戸時代後期～ 明治時代初期	紙本淡彩・卷子	個人蔵(寄託作品)	41.2 × 135.5
No. 52	荻山雅弘	模本類	江戸時代後期	紙本墨画・まくり	個人蔵(寄託作品)	41.0 × 135.0 ほか



図1
松本山雪《枯木呖々鳥図屏風》
個人蔵（寄託作品）

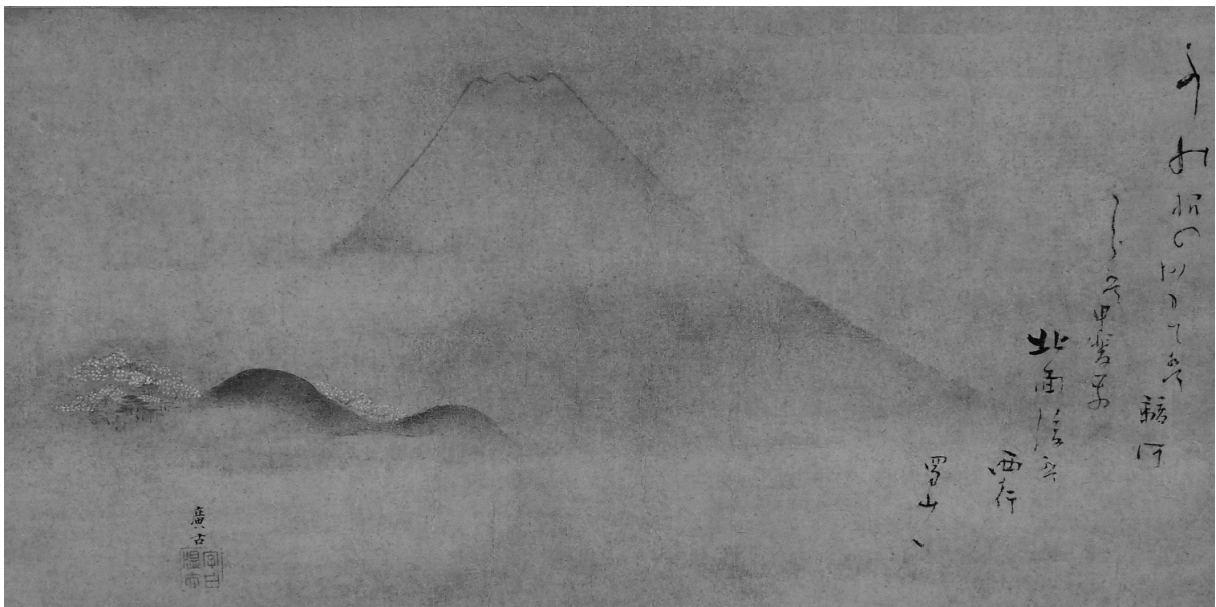


図2
遠藤広古《富士図》
個人蔵（寄託作品）

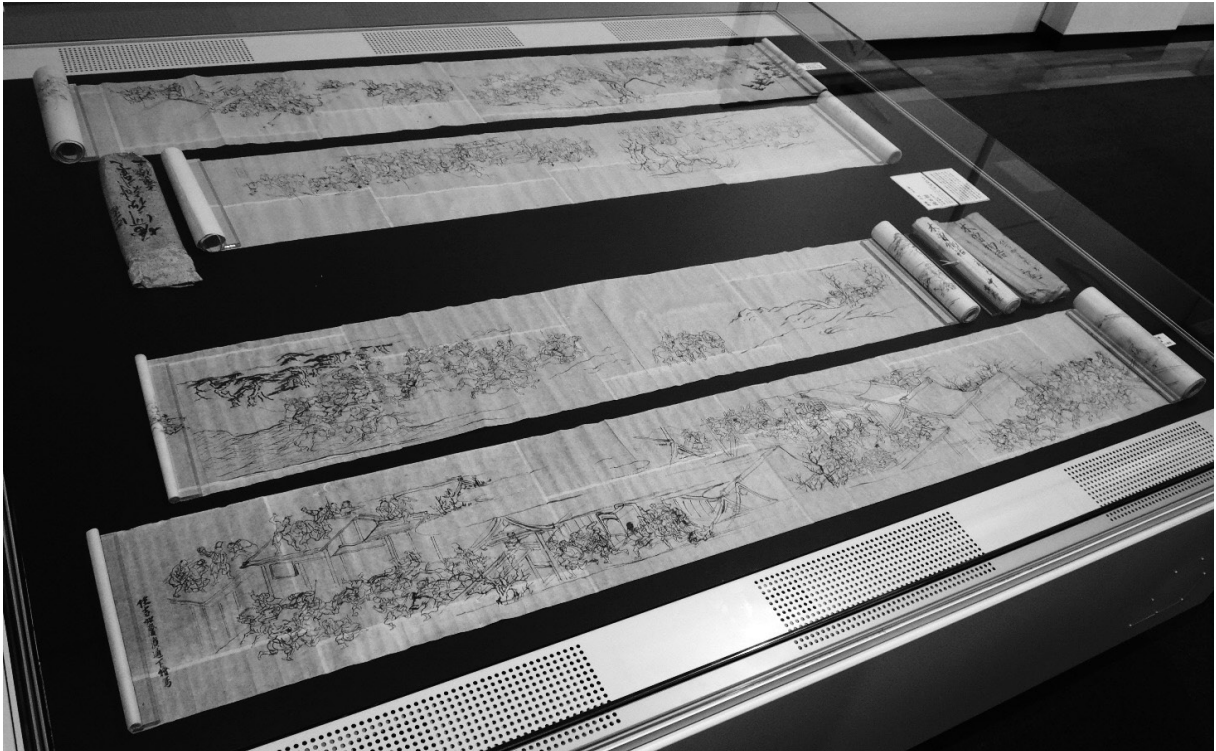


図3
遠藤広古・広実《模本類》
個人蔵（寄託作品）



図4
荻山雅弘《海岸山岩屋寺図》
個人蔵（寄託作品）